

No. 79 2020 年



日彫会報

公益社団法人
日本彫刻会

事務所 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-29-18 レジョン・ド・諏訪202号室

TEL 03(3209)1861 FAX 03(3232)0557

<https://www.niccho.com/> email: jimu@niccho.com

新たな可能性と希望を抱きーコロナ禍を乗り越えて

《 トピックス 》

「彫刻研究誌ーアートライブラリー (Japanese Journal of Sculpture)」への改編に向けて



第 91 回通常総会の様子



理事長就任のご挨拶

日本彫刻会理事長 神戸峰男

この度、理事会において引き続き理事長を仰せつかりました。改めて身の引き締まる思いです。

一期、二期ともに委員長をはじめとする会務委員の御尽力を頂き「持続可能な組織構築」など、長年に亘る諸課題に一定の成果をあげることができました。これも常務理事の先生方をはじめとする会員各位の、御理解と御協力の賜と感謝を申し上げます。

三期目は創立50周年の記念事業に向け、会員一丸となつての船出となりました。しかしながら、昨年末に中国で発生した新型コロナウイルスの世界的蔓延により、誠に残念ではありますが、50周年記念をはじめとする全ての事業を、延期・中止することといたしました。

ウイルスの脅威が我国の社会構造・生活をも大きく狂わせ現在もその禍中にあります。日本彫刻会の今後の活動もいかにあるべきか模索しておりますが、各位におかれましては、どうか今を雌伏の時ととらえ、更なる立体表現の確立に向け研鑽の手を緩めずにいていただきたく存じます。

日本彫刻会はこれを期に新たな可能性と希望を抱ける「日彫会」へと前進できると確信しております。

来年こそ創立50周年を皆様と共に祝えることを祈念し、ご挨拶とさせていただきます。



委員長就任のご挨拶

日本彫刻会委員長 山田朝彦

この度、神戸峰男理事長のもと引き続き委員長として日本彫刻会の運営に携わることになりました。前任期間、本会会員、会友、一般鑑賞者の皆様には、多大なるご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。これからも理事長、常務理事の先生方にご指導頂きながら、会務委員と共に本会のために力を尽くして参る所存です。何卒、宜しくお願い申し上げます。また、コロナ禍により様々なご苦勞されている方も多いかと拝察しております。この場を借りて衷心よりお見舞い申し上げます。

皆様が作品制作に心血を注ぎ、出品を心待ちにしておられた「第50回記念日本彫刻会展覧会」はコロナ禍で先が見通せず、文化庁の要請もあり断腸の思いで一年先に延期とさせて頂きました。又、日仏会館での特別展「日仏をつなぐ彫刻芸術の系譜―戦後の具象彫刻を牽引した彫刻家たち―」、日本橋三越本店での「日本彫刻会俊英作家小品展」、銀座ギャラリー青羅での「新鋭選抜・受賞作家展」も写真撮影や印刷物作成など一部の準備を終えておりましたが、社会状況を鑑みて中止とし、次年度へ延期する事となりました。それに併せ、「日本彫刻会史Ⅱ（2001―2020）」の刊行も一年延ばす事となりました。未知のウィルス感染症が私たちのような美術分野にも大きな影響を与えていることに慄然とし、本当に悔しい思いであります。

しかしながら、6月以降、社会が少しずつ動き出しており、私たちも次の展覧会に向けてより充実した内容の展覧会を企画し、これまで以上に魅力ある日彫展

を世の中に示していく準備を進めてまいりたいと思っております。そして、その準備を既に始めております。

我々は作家集団ですが、今回のコロナ禍の辛い経験の中で、それぞれ制作においても今までとは違う何かを感じられているのではないかと思います。来年に延期された第50回記念日本彫刻会展覧会ではこの試練を乗り越え、新たな知恵、技術、勇気を身につけていきたいものです。理事長、理事の先生方を中心に委員一同、50周年、更に51年、52年と新たな歴史のページを作りあげなくてはなりません。本年度は展覧会もなのに、年会費・記念事業特別分担金等のご負担をお掛けしておりますが、来年度の50周年記念展等で会員・会友の皆様へ還元できるよう企画しておりますので、どうかご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

長年にわたり日彫会の事務運営に当たってもらっていただきました佐藤夏奈さんですが、この3月末日をもって退職されました。IT時代に入り色々事務の合理化を一手に引き受けて頂き、本会の為に尽くしてこられました。佐藤さんの貢献に委員長として心より感謝し、深甚なる敬意を表したく思います。4月より新たに寺町さとみさんが職員としてお手伝い頂き、ベテランの長井さんと二人体制で頑張ってもらっております。

非常に困難な状況ではありますが、新たな日彫会のページを生み出していくために、皆様とご一緒に勇気をもってこの時代を乗り越えていきたいと切に願ひ、委員長の挨拶とさせていただきます。

2020年度 日本彫刻会総会

第91回通常総会報告

2020年1月19日（日）午後3時から日展会館において第91回通常総会が開催されました。

出席者 正会員 175名（内委任状134名）

定款17条の定めるところにより総会成立

議事

第1号議案 平成31年度事業報告承認の件
第2号議案 平成31年度決算報告承認の件・監査報告

第3号議案 第50回日本彫刻会展覧会開催に関する件

第4号議案 定款施行細則変更の件

第5号議案 会員資格喪失の件

第6号議案 会員状況承認の件

第7号議案 役員改選の件

第8号議案 その他の件

全議案とも異なく承認されました。

報告

1 2020年度事業計画の報告

2 2020年度予算の報告

3 委員改選の報告

委員長 山田朝彦

会務委員（10名）

庶務部 ○廣川政和

安田陽子

企画部

武本大志

宮坂慎司

森矢真人

中原篤徳

小関良太

会計部 ○川崎義昭 堀内有子
出版・広報委員（7名）

○堀内秀雄 一鍬田徹 田丸稔

三政洋一 高野眞吾 鈴木紹陶武

永江智尚

研究誌編集委員（5名）

○堀内秀雄 一鍬田徹 田丸稔

前芝 武史 宮坂慎司

50周年記念事業委員（18名）

池川直（担当理事）

石崎義弘 工藤潔 齋藤尤鶴

九後稔 清家悟 堀内秀雄

一鍬田徹 田丸稔 三政洋一

高野眞吾 鈴木紹陶武 永江智尚

間島博徳 宮坂慎司 森矢真人

武本大志（敬称略） ○印 各部主任

4 新運営委員および新無審査会員の報告

5 第50回日彫展審査員の報告

6 第50回日彫展会友推挙選考委員の報告

7 50周年記念事業2020年俊英作家小品展（三越展）及び第13回日本彫刻会新鋭選抜・受賞作家

展準備状況の報告

8 50周年記念事業の準備状況の報告

9 その他の報告

高齢者会員祝賀

数え90歳を迎えた常務理事の川崎普照先生に、
賀詞と記念品が贈呈されました。

慶 事

改組 新第6回日展（令和元年度）

文部科学大臣賞

「瀬」

勝野眞言

東京都知事賞

「あおあらし」

齋藤尤鶴

日展会員賞

「ささやかな一日の終わりに」

中原篤徳



会務委員の紹介の様子

◇展覧会延期・中止の経緯報告

新型コロナウイルスの感染拡大、政府による「緊急事態宣言」により、日本彫刻会で本年度予定されていた50周年記念行事の大幅な見直しをすることとなりましたので、会員の皆様にご報告致します。

日彫展開催直前の3月7日の会務委員会で開催判断の検討がなされました。当時、東京都美術館はコロナウィルスに対して検討中であり、開催は使用団体の判断に委ねる方向でしたが、東京都は3月15日まで東京都主催の屋内イベントのうち大規模なものや食事を提供したりするものは、原則として延期もしくは中止の方針が出されていました。また、3月末開催の公募団体展が中止を決定している状況でした。日彫会では、会員及び観客層に重篤化しやすいとされる高齢者の割合が高い点、準備から開催まで、密閉空間で多数の人員が長時間滞在する日が10日間程度ある点、地方の作品搬入（業者）タイミングが日彫展搬入日より早い方もある点を考慮しつつも、第50回日彫展を開幕式、授賞式、オープニングパーティ、ギャラリートーク等を縮小もしくは中止として開催を目指していました。オープニングパーティに関しては開催を取りやめにする一方で、日仏展の開幕日に合わせ日仏会館のある恵比寿で会場を準備し懇親会の開催を計画しておりました。

しかし感染の拡大により、開催可否の決定が求められるぎりぎりの、地方搬入が始まる直前の3月25日（水）に、第50回日彫展開催可否についての臨時理事会が芸術院会館にて開かれました。その際に、日彫展以外の行事についても今後の方向を確認することとなりました。

50周年記念事業は次の通りです。

◎「第50回記念日本彫刻会展覧会」

（2020年4月18日～5月2日 東京都美術館）

◎「日本彫刻会俊英作家小品展」

（2020年4月29日～5月5日 日本橋三越本店）

◎「特別展 日仏をつなぐ彫刻芸術の系譜―戦後の具象彫刻を牽引した彫刻家たち―及び関連イベント」

（2020年6月27日～7月10日 日仏会館ギャラリー）

◎「第13回日本彫刻会新鋭選抜・受賞作家展」

（2020年7月12日～7月18日 銀座 ギャラリー青羅）

◎50周年記念誌「日本彫刻会史Ⅱ（2001-2020）」

（2020年12月発行予定）

このうち、理事会において感染拡大への懸念その他の状況を鑑み、第50回記念日本彫刻会展覧会の本年度の開催を中止とし来年度に延期することとしました。日彫展以後の記念事業については三越の企画による「日本彫刻会俊英作家小品展」を除いて今後の感染の様子をふまえて理事長が開催の可否を判断するとの方向が決まりました。

その後、新型コロナウイルス感染拡大及び政府による緊急事態宣言発令に伴い理事長判断により、中止、延期の決定がなされました。

中止となった行事は「日本彫刻会俊英作家小品展」（三越本店の計画で延期開催5月20日～としましたが、営業自粛に伴い、開催中止となりました）、「第13回日本彫刻会新鋭選抜・受賞作家展」の2つの展覧会、「特別展 日仏をつなぐ彫刻芸術の系譜―戦後の具象彫刻を牽引した彫刻家たち―及び関連イベント（場所は日仏会館、日程は未定）、及び50周年記念誌「日本彫刻会史Ⅱ

（2001-2020）」発行は来年度に延期されました。

昨年度から始まり本年度2回目となる、第2回U-20日彫展「集まれ！未来の彫刻家」は1月より応募が始まっており3月13日（金）に応募が締め切られていたため、3月25日（水）に理事長、委員長と会務委員にて審査を行い当初の予定通り入賞者・入選者を決定しました。該当者にはすでに連絡をし、今後の予定について連絡済みとなっています。本年度の受賞作品は来年度開催予定の50回展にて、第3回入賞作品と一緒に展示することになっております。

50周年を迎えなんとか記念展の開催に向け理事長を中心に委員長、会務委員一同準備を進めて参りましたが、中止の判断をせざるを得ない状況に残念でならないわけですが、気持ちを切り替えコロナウィルス感染が収まることを願い、来年が素晴らしい50周年の記念の年となるよう改めて計画し実行していきたいと思っております。

第50回記念

日彫展

御招待

（来賓の皆様を特別招待いたします）

2020年4月18日（土）～5月2日（土）

9:30-17:30（入場無料）/ 10:00で開演・閉演の両方あり

東京都美術館 ギャラリーA・B・C

（東京都港区上野公園1-12）

※観覧料は1500円（入場料）/ 1000円

開会式

4月18日（土） 10:30-11:00

彫刻研究会（作品批評）

会場（東京都美術館） 4月18日（土）10:00-11:00

東2館（北山品内） 4月18日（土）10:00-11:00

中・南・東3館（東京都美術館） 4月18日（土）10:00-11:00

ギャラリートーク

4月18日（土）15:00-16:00（東2館・東3館）

※開演料は1500円（入場料）/ 1000円

開演時間

東2館（10:00-11:00）

東3館（10:00-11:00）

中・南・東3館（10:00-11:00）

会場：東京都美術館（東京都港区）

公演券購入：日本彫刻会

1500円（税別） 東京都美術館（東京都港区） 10:00-11:00

1500円（税別） 東京都美術館（東京都港区） 10:00-11:00

1500円（税別） 東京都美術館（東京都港区） 10:00-11:00

「机上の美」 50周年記念事業

日本彫刻会 俊英作家小品展

会期/2020年4月29日（水）～5月5日（火）

（午前10時～午後7時） 最終日は午後6時閉場

※観覧料は無料（入場料）/ 1000円

※入場料は1500円（入場料）/ 1000円

※入場料は1500円（入場料）/ 1000円

会場/日本橋三越本店 本館6階 アートスクエア

〒103-8003 東京都中央区日本橋室町1-4-1

延期・中止になった展覧会のDM

アートライブラリーは2000年に本会の研究誌として創刊されました。これまで、古典から現代彫刻まで、執筆者の先生方に古今東西の彫刻芸術を幅広くご紹介いただき、国内有数の彫刻専門誌として発刊を重ねてきました。本年4月までの発刊実績は21号に及び、まさに本会の公益社団法人としての責務を果たす事業となつていきます。

そして、創刊から20年を数え、アートライブラリーは、これまでの寄稿論文の掲載を継承しつつ、さらにその彫刻研究の専門性を広げ、次号から大きな変革を迎えることとなりました。その核となるものとも大きな変化は「広く論文投稿を受け付ける」点にあります。

これまで、アートライブラリーには、美術評論家・

美術館関係者（館長・学芸員）・大学教員等々、様々な立場の研究者がそれぞれの論考を寄稿してくださいました。アートライブラリーをお読みいただいている方々には、それらが量・質ともに充実した蓄積となつていることは言うまでもないことでしょう。一方、目を向ければ、本会自身にも長い歴史の中で培ってきた発信すべき事柄が多くあります。彫刻表現に関わる素材や技法の研究を始め、彫刻作家や彫刻史の記録と記憶、鑑賞支援や教育の実践を会員のそれぞれが蓄積してきたのではないのでしょうか。今回の変革は、様々な角度から各成果の発信を目的として、彫刻研究誌においても論考を公募で受け付けるものと言えます。

アートライブラリーの新たな方針を示すにあたり、

これまで理事会・会務委員会では様々な議論を重ねられてきました。その結果として、「研究誌編集委員会」が立ち上がり、2020年1月の総会において承認を得たことは記憶に新しいところかと思えます。これまでの経緯について、左記で簡単に振り返ってみます。

（理：理事会、会：会務委員会、研：研究誌編集委員会）

2019年

6月 研究誌化に向けた提案・規程原案作成（会）

6月 研究誌化提案の承認（理）

10月 定款施行細則改定に向けた準備開始（会）

10月 定款施行細則改定案（研究誌編集委員会の設置）承認（理）

2020年

1月 研究誌編集委員会創設承認（理：総会）

6月 編集規程・投稿規程・審査規程・執筆細則等の案作成（研）

7月 各規程及び刊行スケジュールの承認（会）

9月 各規程等の承認（理）

10月 会報による情報周知（出版・広報委員会）

新アートライブラリーは、これまでの名称を継承し、『彫刻研究誌 アートライブラリー』となります。日本を代表する彫刻芸術・立体造形の専門誌として、英語では“Japanese Journal of Sculpture”と称することとなりました。編集規程に記された「目的」は以下の通りです。

「目的 本誌は公益社団法人日本彫刻会が発行する研究誌であり、彫刻芸術に関わる国内外の研究のほか、彫刻制作に関する実践を含んだ表現研究などを幅広く収載することで、建設的な討議の場を提供し、彫刻文化の発展に寄与することを目的とする。（編集規程第二条より）」

なお、投稿論文を受け付ける研究誌とするにあたり、今回定められた各規程は本会ホームページ上で参照することができ、こうした規程を定め、査読付きで論文を募ることで、将来的には日本学術会議協力学術研究団体への登録（学会登録）の資格を得ることもできます。学会登録することで、研究誌の位置付けはより確かなものとなり、本会の外からも彫刻論の投稿が集まることを期待でき、結果として「わが国芸術文化なかんずく彫刻芸術の一層の発展向上を目的としてますます活発な研究、創作活動を展開せんとする」という本会の趣意に繋がるものとなります。

創刊に際して、左記が今後のスケジュールです。

2020年

10月 ホームページへの詳細情報掲載

投稿受付開始

寄稿論文依頼

2021年

3月 論文投稿締切 3月7日（日）

4月 論文査読（論文審査）

7月 査読結果に基づく掲載採否の審査

8月 校正

9月 創刊号発行

論文の投稿から査読、刊行までの流れは下図のようなイメージとなります。論文の投稿は「正会員から」を基本としますが、正会員の推薦を得ることで、会外の方々も研究成果を投稿することができます。また、査読については論文審査規程に則り公正に、必要に応じて会外の学識者に委嘱することもあります。

論文紙面は左図のようなイメージとなります。基本的な書式は二段組で、標準6ページ、原則として12頁以内としています。図表を挿入することも可能です。

文字のみで記入していくと、1頁あたり約2300字で、図表の量にも異なりますが、概ね一万字〜一万五千字程度の文章量を想定しています。基本的には、オンラインにて、完全版下原稿での提出となります。論文テンプレートを含め、投稿に関する情報（投稿手順等）はホームページにてご確認ください。

研究論文という水準には至らずとも、新規性や速報性を有するもの、新たな表現への示唆を含むものも「研究ノート」として積極的に受け入れていく方針です。皆さまからの、彫刻研究成果の積極的な投稿をお待ちしています。

展覧会の開催、彫刻資料の供給、機関誌の発行等を行い、わが国美術界に貢献するところまことに大なるものがあつた。④

3.6.3 図版典拠

文末の「引用文献」の後に図版の典拠を明記する。出典については、引用文献と同様に、本稿末に記されている図版典拠例の形式に倣うものとする。

図版等の使用について、必要な場合は、執筆者が著作権に関する措置を講じる。

4. 図表

4.1 図表の扱い

本稿において「表」とは、文字・数字・記号と縦横の罫線のみで表されるものを指す。一方、「図」とは、作品写真・説明のための描画・グラフ・フローチャート等を指し、「表」に当てはまらない不定形のもの全て「図」と定める。

図と表はそれぞれ区別し、「図 1」「表 1」といったように通し番号をつけて表記する。図表を挿入する際は本文中の適した箇所而言及される必要があり、説明の無い図表が単独で示されることは認められない。

原稿にはカラー図版を認める。電子版として公開される際には、カラー原稿となる。ただし、紙媒体の研究誌はモノクロ印刷となるので、その場合でも視認性に問題が無いことを執筆者は予め確認しておく必要がある。

電子原稿（提出用 PDF データ）においては、図表の解像度が 330dpi 以上となるように設定を行う。また、フォントは全て埋め込む設定としておく。

4.2 図

図は写真や描画などが十分に鮮明なものを用い、図中の文字は本文の文字サイズと釣り合う大きさを基本とする。図 1 に例を示すように、図の表題・キャプションは図の下につける。表題・キャプションのフォントは「4.3 表」において示す。

4.3 表

図の場合と同様に、表中の文字は本文の文字サイズと釣り合う大きさを基本とする。表題・キャプションは表の上につける。

表 1 は、本稿に用いるフォントの詳細を示したものである。表中のフォントの種類について、括弧内は実際に本稿において設定されているフォントを示している。

表 1 本稿において使用するフォントの種類及びサイズ

箇所	フォント種類（括弧内推奨）	サイズ（pt）
タイトル	ゴシック（MS P ゴシック）	16
サブタイトル	ゴシック（MS P ゴシック）	12
タイトル（英）	サンセリフ（Arial）	12
氏名	明朝（MS 明朝）	14
所属	明朝（MS 明朝）	10.5
氏名・所属（英）	セリフ（Century）	10.5
抄録	明朝（MS P 明朝）	10.5
Abstract	セリフ（Century）	10.5
キーワード	明朝（MS 明朝）	10.5
章・節タイトル	ゴシック（MS P ゴシック）	10
本文	明朝（MS P 明朝）	10
図表表題	ゴシック（MS P ゴシック）	9 程度
註・引用文献・図版典拠	明朝（MS P 明朝）	9 程度
英数（タイトル以外）	セリフ（Century）	適宜

表中に指示がない、或いは原稿を Microsoft Word 以外で作成する場合は表 1 を基本とした上で、執筆者の判断で適宜定めることができる。ただし、その場合も原稿全体の統一感に留意することが求められる。

図表は文字のみの情報を視覚的に補うものであり、簡潔明瞭な記述のためにも積極的に用いることを推奨したい。特に、彫刻表現に関わる詳細について論じる場合にはその論拠となる図版が示されることが望まれる。

5. 確認事項

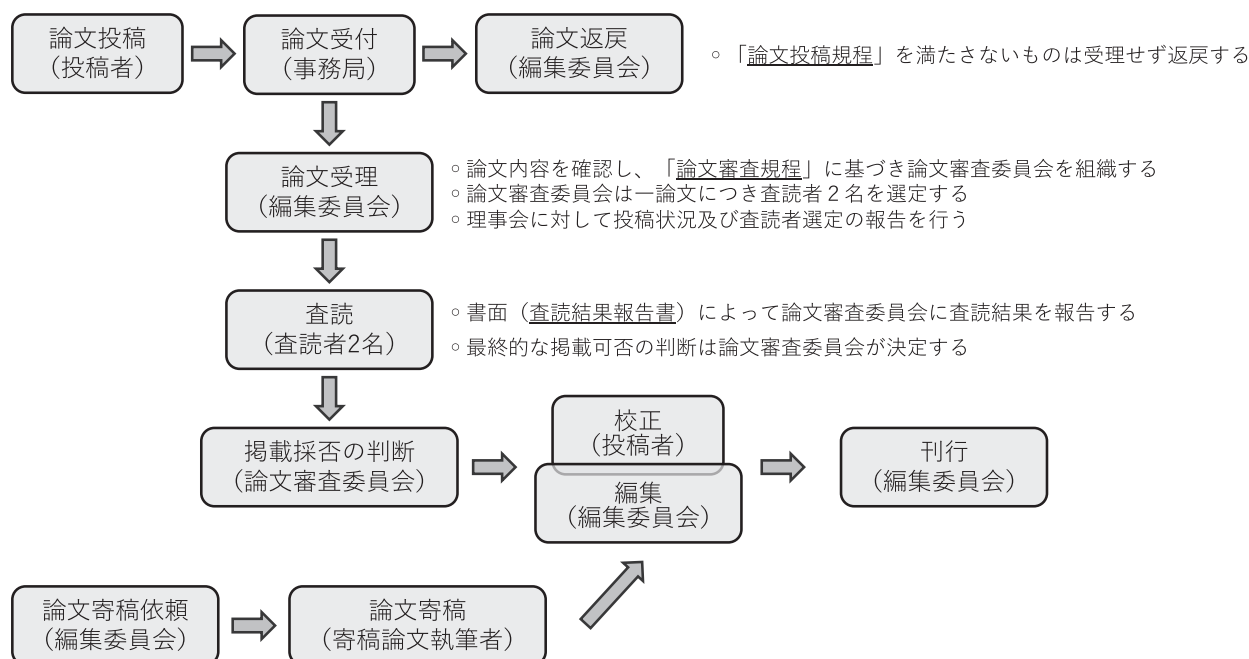
以上のように、本稿では『彫刻研究誌 アートライブラリー』の書式を示してきた。

最後に、ここで投稿に際しての確認事項を挙げておくので、執筆者は下記を確認の上で投稿に臨まれたい。

図 1 公益社団法人日本彫刻会シンボルマーク

＜論文紙面のイメージ＞

○『彫刻研究誌 アートライブラリー』刊行の流れ



◎上記全ての手続きは「編集規程」に基づいて進められる

◇第2回U-20日彫展

く集まれ！未来の彫刻家く

前回より始まりました、彫刻の魅力を幅広く紹介し、併せて次世代の彫刻家の育成を目指した取り組みである、第2回U-20日彫展に今回は34点の応募がありました。

しかしながら、第50回記念日彫展が開催延期となった為、通常の審査が行えませんでした。3月25日に神戸理事長、山田委員長、会務委員で審査を行い、34点全てを選とし、特に優秀な6作品を入賞とさせて頂きました。U-20日彫賞、U-20優秀賞の選抜審査を行うことはできませんでした。

受賞されました6作品につきましては、次回開催されます第50回記念日彫展にて出品、展示を行う予定であります。

出品者

○青木謙征

天野美月

今瀬碧月

奥村希

北柄博貴

崎元楓

鈴木雅

○田中和花

○中舎幸太郎

林陸朗

水野佑菜

横地拓海

青木ほのか

磯谷南奈

太田真菜

加藤彩夏

小嶋勇矢

○須江みれい

鈴木杏奈

利岡光靖

額田陽奈子

兵藤なつみ

村川佑里奈

○青木雄生

伊藤優子

岡井弥玖

○北園拓真

坂岡賢志郎

杉山仁之介

鷺見侑紀

中澤賢

濱田天竺

古屋柚

村山千裕

(順不同・敬称略・計34名 ○印は入賞者)

受賞作品



田中 和花
「掠める」
63cm×37cm×52cm
石膏、発泡スチロール



須江 みれい
「鬼瓦」
25cm×30cm×15cm
粘土



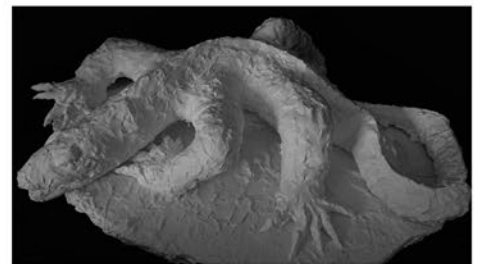
青木 謙征
「木にのぼるカメレオン」
80cm×50cm×40cm
紙粘土、発泡スチロール、木、石膏



中舎 幸太郎
「人間を嫌う蜂」
55cm×70cm×45cm
石膏、発泡スチロール



北園 拓真
「木彫のトルソー」
75cm×38cm×33cm
木(楠)



青木 雄生
「獲物を狙う水オオカゲ」
40cm×80cm×20cm
紙粘土、発泡スチロール、石膏

入
選
作
品



利岡 光靖 「黄金時代」



坂岡 賢志郎
「突破できない壁は無い。」



太田 真菜 「きつねうどん」



岡井 弥玖 「廃れ」



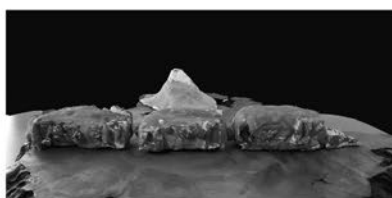
青木 ほのか 「夜の遠吠え」



中澤 賢 「ぎゅう」



崎元 楓 「おねだり」



杉山 仁之介
「みらいのしんかんせん」



奥村 希 「伸び」



天野 美月 「冬桜」



額田 陽奈子 「大龍」



鈴木 雅 「舐める」



加藤 彩夏 「温鍋」



磯谷 南奈 「魔女の住む家」



濱田 天宝 「手を繋ご」



鈴木 杏奈 「もちっ」



北柄 博貴 「窮鼠」



伊藤 優子 「ふりーず」



林 陸朗 「滴る」



荒見 侑紀 「会いに行きます」



小嶋 勇矢 「格闘」



今瀬 碧月 「太古を見つめる」



村山 千裕 「ラオコーン」



水野 佑菜 「日の光」



兵藤 なつみ 「魔法盤」



横地 拓海
「マッスルシャーク」



村川 佑里奈「松のある風景」



古屋 柚 「ひといき」

◇白石恵里会員のアトリエ訪問

アトリエ訪問

彫刻作品や美術館の紹介、会員のアトリエ訪問について記事を書く場合、原則的に現場を取材して会報に掲載しています。ですが、新型コロナウイルス感染拡大防止を受け、会報の取材移動も自粛を迫られました。

このような中、今回のアトリエ訪問では、ビデオ通話による取材をいたしました。通話で使った「Zoom(ズーム)」という無料のサービスは、手元のパソコンやスマートフォンに、互いの映像と声が出ます。さらに、自分のパソコンの中の写真や書類を、相手の画面に直接映して話することもできるので、「昔のアトリエの写真」や「勤務先のパンフレット」などを見せて会話をすることができます。この「Zoom」を使い、福岡県に住んでいる白石会員も、愛知県の筆者も、ステイホームの状態で行わ



取材の様子



1 軒目のアトリエの制作風景

れました。

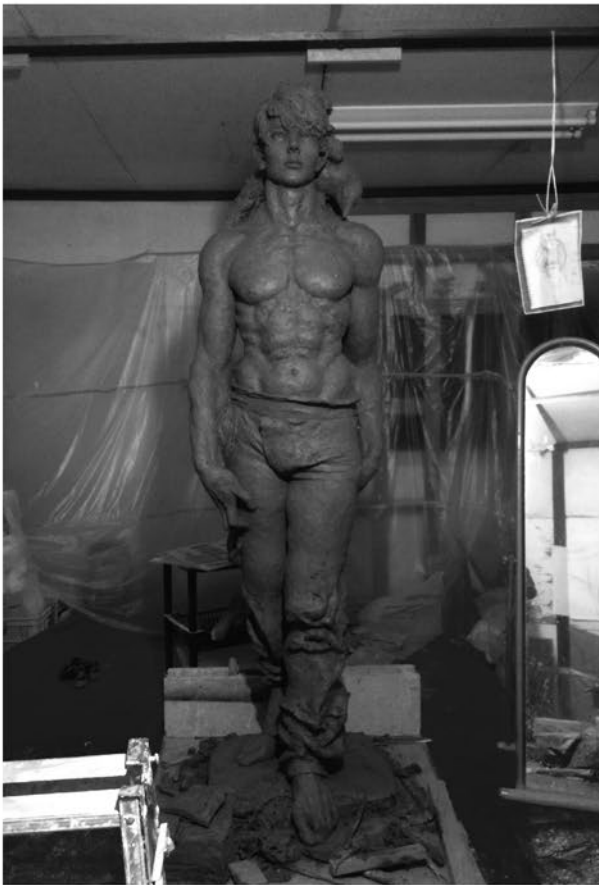
白石会員は佐賀県の大学院を出ると、福岡県の実家に戻り、最初のアトリエを設けました。様々な理由から移転して、現在のアトリエは四軒目にあたります。

一軒目、大学を出て最初のアトリエは、田舎にある実家の野外でした。塑造作品から植物が芽生え、鳥や昆虫が飛来し、カエルが粘土に住み着き、蚊や炎天下・台風への対処に悩まされ、心が折れそうになりました。一年間耐えたとのこと。

その後、実家にあった空き小屋に手を加え、六畳ほどの作業場をこしらえたのが、二軒目のアトリエです。田舎の小屋なので、蛇や昆虫などは相変わらず訪問してくる環境でしたが、念願の屋根と壁を手に入れることができました。ただ、電気系統が断線して使えず、水道も通っていないアトリエだったので、石膏型をきれいにするために、近くの川で洗ったこともあったそうです。ここで四年間制作していました。

教員養成大学の助手に採用されたことを機に、勤務校の近くに引越し、アパートでの一人暮らしを始めました。日々の制作時間を確保できるように、そのアパートの部屋を住む場所、兼、三軒目のアトリエとしました。ワンルームの一角、ロフト（屋根裏収納）の下、ブルーシートを敷いた三畳ほどの制作スペースです。

そのアトリエは住宅地の中だったので、異臭を出すことができず、合成樹脂の成型作業ができなかったそうです。そのため、粘土の造形から石膏雌型をとる工程までをここでしました。その後の工程は石膏型をベランダから外に出し、車に載せ、実家のアトリエに持って行って、成型作業はしたそうです。そもそも、アパート選びの際に、「二階であること」「ベランダの塀が低いこと」「ベランダの先に、すぐ駐車場があること」を条件にしていた、石膏型の出しやすさを優先したそうです。ベランダから物を出し入れしやすい部屋なので、窃盗犯や不審者の侵入などセキュリティの問題は大いにある



2 軒目のアトリエの制作風景



粘土保管用バケツ

りますが、制作環境を優先したとのことでした。

そして今年二月、上階の漏水のため退去を余儀なくされ、三年間住んだアパートから引越しました。新たなアパートでは、五畳の一室をまるまる制作スペースにあてました。これが四軒目、現在のアトリエです。以前よりもずっと天井が高く、高い位置についている窓からは、自然光が入っ

てきます。壁や床は、プラスチック製の段ボールや防水シートで、高い位置まで覆ってあるので、汚れを気にすることなく制作に集中することが出来ます。材料や道具は種類ごとに段ボール箱に入れてあり、よく使うへらなどは制作台の傍らなどに置いてありました。粘土はバケツに入れてベランダに保管しており、使う分だけを室内に入れ使っているそうです。無駄な物が制作台の周りになく、制作場の広さが確保されていました。現在のアトリエは使い始めて間もないので、まだ床の強度が分らないため、なるべく粘土作品が重くならないよう、心棒に発泡スチロールなどを入れていくそうです。また、以前のアトリエ同様、街中にあるので、合成樹脂の成型作業はできないのですが、前回の建物と違い、等身大の石膏型はそのままの大きさでは、外に出せないそうです。石膏型を分割するなどの対策を思案中とのことでした。



4 軒目のアトリエの室内の様子 1

移転を契機として、アトリエの環境改善を重ねてきた白石会員の「これまでの苦労や失敗も楽しんでいる様子」が、取材中とても印象的でした。彫刻をつくることは障害がつきもので、誰しもが経験しますが、白石会員のように楽しめること、割り切れること、行動に移して乗り越えることが大事なのだと、気づかされました。これから彫刻を始める方、大学卒業して間もない方などにとっても、本記事が参考となれば幸いです。最後に、遠隔取材という不作法な取材を快諾してくださった白石会員に紙面をお借りしお礼申し上げます。



4 軒目のアトリエの室内の様子 2



愛用のヘラ

訃報

左記の方が長逝されました。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

正会員	西村 祐一 先生	令和元年10月
正会員	若林 盛治 先生	令和元年11月
正会員	西村 王允 先生	令和元年12月

編集後記

◆今年には新型コロナウイルスの影響で、多くの美術公募団体が、事業計画の急な変更を余儀なくされました。本会も同様であり、本紙面でお伝えしたように、中止や延期の裏には多くの方の苦渋の決断があったことを忘れてはならないと感じました。

◆アトリエ訪問で使用しました「zoom」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のために、各自が自宅にいながらも会議をするなどのため、多くの企業で使われるようになりました。大学も遠隔授業が求められたため、芸術系や教育系の大学での彫刻の実技授業を、この「zoom」を使って行っているところもあるそうです。

◆遠隔による取材を通して感じたことは、実際に見るからこそ分かることの大切さです。「百聞は一見にしかず」であり、今後の会報でお伝えする内容も、この「一見」を大切にしてお伝えしていこうと思いました。

◆コロナを機会に「アトライブラリー」が生まれ変わります。新たな可能性と希望に満ちた日本彫刻会を今後の会報でお伝えしていこうと思います。

出版・広報委員

堀内秀雄 一鍬田徹 田丸稔 三政洋一
高野眞吾 鈴木紹陶武 永江智尚

日彫会報 No. 79

令和2年10月1日発行